

# 目まいのする散歩

——高齡者文学人生論

武田泰淳 (1885-1976)

『目まいのする散歩』 (1976) 「中央公論社」

『私の中の地獄』 (1972) 「筑摩書房」

『富士』 (1971) 「中央公論新社」

『司馬遷 史記の世界』 (1943) 「日本評論社」

坂道をひき返そうとして、十歩ばかり歩くと、また、めまいがきた

永井荷風の下町散歩なら私も同じコースを歩いてみたくなる。武田泰淳『目まいのする散歩』も悪くないが、それなりの覚悟が必要だ。

山小屋を出て、坂道を上ると、その先に石山がある。雨に洗い流された石がごろごろしている。そこまで行きつけば、西湖の村々が遙か彼方に見渡せる。遠くの低地からふき上げる風が心地よい上に、特別上等な場所と思われて爽快な気持ちになる。座禅の真似をして座り込む。

富士山は、今上ってきた坂道の正面に頭をのぞかせているはずだ——こんな散歩も悪くないと思うが、やがて、立ち上がるとめまいがきた。しばらく静かにして、三度めか四度めに立ち上がったときに、めまいが消えたので、坂道をひき返そうとして、十歩ばかり歩くと、まためまいがきた。

どうしてめまいがするかという脳血栓の後遺症だ。小説『富士』にとりかかる頃からおかしくなり、後半にさしかかる頃、ビール、焼酎、泡盛、日本酒、ドブクロ、ウイスキー、高粱酒、老酒、ジン、ウオツカ、ブランデーなど、出来るだけ組み合わせのわるい酒を同時に飲み、出来るだけ妙な酔い方をして書き続けた。

入院して、手術を受ける。退院後はおとなしくしていればよいのに。医師に禁じられた酒をのむと、ついふらふらと無理がたくなる。アルコール



高齢者文学人生論

## 日まいのする散歩

ル依存症かもしれない。同じく第一次戦後派の作家で、戦争体験のある梅崎春生が飲み続けられ死ぬと医師に宣告されたのに、酒を飲み続けて死んだ。緩慢な自殺みたいなもので、自分もそれに似通ったものだという自覚があった。

酒も飲むが、散歩もよくする。東京では赤坂の自宅から十分程度の明治神宮、武道館、代々木公園の三つが散歩のコースだ。百合子夫人が同行して、手こそ握りはしないが、形影相伴うようにして仲よさそうに歩いてゆく。

夫人はうわばみと呼ばれるほどの大酒飲みで、酔っぱらった彼女が焼跡の空地のゴミ箱の上に立ち、髪の毛を逆立てているところは、鬼姫そっくりだった。かなしむべきか、喜ぶべきか、武田泰淳は鬼姫なしでは暮らしていけなくなる。『目まいのする散歩』の原稿は鬼姫依存の口述筆記だ。

武田泰淳は浄土宗の寺で生まれた。浄土宗の開祖は法然。『私の中の地獄』によれば、法然の父は武士によって殺されたが、死にのぞんで父の仇をとってはならぬと言われ、父の教えに従って出家した。「私は法然の教えは正しいと考える。だが、法然の教えを正しいと考える私は正しいだろうか」などと自問する武田泰淳は、酒を飲み、散歩をし、小説を書きまくり、糖尿病、脳血栓症、胃ガン、肝臓ガンを患って六十四歳で死んだ。

露の身はそこかしこにて消えぬとも

心はおなじ蓮のうてなぞ

法然